

北条五代記

みうら・じょうしん

作者:三浦浄心(1565-1644)

成立:元和年間(1615-1623)



解題

Keyword

- 小田原北条氏
- 仮名草子
- 「見聞集」
- 「そゝろ物語」
- 「慶長見聞集」
- 「見聞軍抄」

小田原北条氏五代にわたる出来事、逸話を収録した文献資料。文芸上は仮名草子に分類される。原作者の三浦浄心が北条氏遺臣であったため記述に迫真性があり、比較的史料的価値が高いとされる。

元和年間の成立か。戦国末期北条氏の治世・世相史料が乏しい中で貴重な存在とされる。



(版本)『北条五代記』万治版
卷10の1「相模三浦三崎宝蔵山旧跡の事」
挿絵 三崎湊に唐人到来という

■ 成立経緯

本書の序によれば、三浦浄心の書き残した『見聞集』は32冊に及ぶ大作であったという。その中から小田原北条氏五代に関する部分を抄出したものが『北条五代記』である。浄心は北条氏遺臣で、天正18年(1590)小田原落城のとき籠城していたが逃れしばらく故郷三浦三崎に隠棲していた後、江戸に出た。その時期は明らかでないが慶長年間には江戸に住み、新府江戸での見聞や北条氏家臣時代の体験などの著述を始めたと考えられる。

『北条五代記』抄出の経緯は、相州住人である浄心の旧友某が、浄心の居室に草案のまま打ち捨てられていた『見聞集』を披見し、「往時床しき北条家の沙汰ばかり

をひろひ出し」て10冊に編集し、『北条五代記』と名づけたと記されている(旧友某は浄心自身が仮託したものと説あり)。またこの序では収録対象年代の下限を、慶長19年(1614)までとしたとも明記している。

だが、寛永本巻9の7(注:以下引用はすべて寛永本)「関八州の舛に大小有事」では、徳川二代秀忠時代の元和年間に、10合入りの舛を新たに作り普及させたとする記事があり、序と矛盾している。従ってこの部分をはじめ幾つかの部分で、第三者の加筆があった可能性が指摘されており、最終的に成立した年代は元和年間(1615-23)と考えられている。

■ 作者

『北条五代記』の原著者三浦浄心は、江戸に出て三浦五郎左衛門茂正と名乗ったが、もとは小田原北条氏の家臣出口氏である。祖父は出口五郎左衛門茂忠といい、三浦同寸義同(よしあつ)に仕えていた。永正13年(1516)同寸が伊勢宗瑞(北条早雲)に攻められ相州三浦郡新井城に滅んだとき、茂忠は三崎城を守っていて城ヶ島に逃れ、程なく北条氏に属することになった。

三浦郡下宮田村に「出口」の小名が認められ(現・京浜急行電鉄「三崎口駅」北西側)、ここに居住していた三浦十人衆の一族であったと推定される(巻9の6「人名題号にしらるゝ事」)。三浦十人衆は小田原所領役帳に見える「三崎拾人衆」と考えられ、同書に「海賊被仰付」とある。父茂信は北条氏四代の氏政に仕え、房総の里見義弘との戦闘や武田信玄との海戦でたびたび武功を顕した(巻4の1「北条氏政東西南北と戦ひの事」)。

浄心は永禄8年(1565)に生まれ、13歳の天正5年(1577)に父が死ぬと氏政に出仕した。同18年26歳のとき小田原落城の憂き目に会い三浦に隠棲したが、江戸の殷賑ぶりを聞き及び出府し、慶長年間には江戸に住んでいたという。日本橋伊勢町に居住していたとの記事がある(慶長見聞集巻之5「花をる咎に縄かゝる事」)。

寛永寺開祖天海僧正に帰依し法号浄心と唱え、現在の上野公園内清水観音堂付近に庵を結んだ。風雅の道に遊びつつ小田原北条氏興亡の顛末に思いを致し、また開府直後の江戸の町とそこに暮らす町人たちの姿を観察、風俗世相を考証して著作に残したという。

正保元年(1644)浄心は80歳でこの地に没した。明治の頃には上野下寺通普門院址に墓碑が確認されていたというが、土地の変遷により現在では不明となっている。なお浄心の子孫には、延享2年(1745)徳川吉宗に召出され廩米(りんまい)五百俵を給された「三浦義周(よしちか)」(『寛政重修諸家譜』)を擬する説と、日本橋小船町に存在した塩物店三浦庄左衛門・同半三郎とする説があるが、いずれも確証を得ていない。

なお三浦浄心の著作『見聞集』32冊からは『北条五代記』の他に、初期の吉原や風呂繁盛の様子を伝える『そゝる物語』(寛永18年開板)、開府間もない江戸の町の世相と町人の人情風俗を集めた『(慶長)見聞集』(慶長19年奥書)又は『江戸物語』、源頼朝以降の東国合戦話を抜き書きした『見聞軍

抄』(寛文7年版行)などが抄出、編集されたという。

■ 内 容

『北条五代記』の各条は「聞しは昔」「見しは昔」又は「聞しは今」で始まり、寛永本では74条のすべてに標題を立てている。北条氏初代の伊勢宗瑞(早雲)の知略と仁政について詳述することは当然だが、二代氏綱・三代氏康が山内・扇谷両上杉氏や房総里見氏と繰り広げた死闘の次第も紙幅を費やしている。また巻十の七「北条氏直没落の事」などを見ても、小田原評定などと揶揄される四代氏政や五代氏直もけって愚鈍には扱っていない。旧主北条氏への温かい眼差しと、諦念に近い宿命観が全体を支配している。

浄心は孟子などの漢籍や吾妻鏡などに通暁していたらしく、至る所で引用され博覧強記ぶりを発揮している。注目すべき記事として「(巻3の3)関八州に鉄砲はじまる事」では、氏綱時代に鉄砲が関東に伝来したことの由来や、氏康の代には堺から鉄砲製造の名人を呼び寄せ、小田原籠城戦では威力を発揮したことが語られる。また天正6年(1578)には唐の黒船が三崎湊に着岸し通交があったことを記している(巻10の4「相模宝蔵山旧跡の事」)。

北条氏に直接関係するもの以外にも、当時の庶民の暮らしぶりなどを伝える挿話も数多く収める。例えば少年期の些細な諍いが悲劇に発展する「(巻8の10)童男の作法昔に替事」など印象的で、往時の人の心情が垣間見える。

■ 諸 本

『北条五代記』は寛永18年版(1641)と万治2年版1659(万治2)の2種の版本が知られている。寛永本は74条、万治本は57条でその差は17条にのぼる。また、標題が同じでも内容のまったく異なるものがあるので注意が必要。

寛永本は『北条五代記(抄)』(人物往来社『北条史料集』所収)で活字化されており、万治本は末尾に「万治二己亥歲初春風月庄左衛門板行」とあり、『改定史籍集覧』他の底本となっている。



史料本文を読む

<版本>

- 『北条五代記』 巻之1～10 風月庄左衛門 1659 [K24.7/3]
- 『絵本北條五代記』 岡安平九郎 1886 [K24.7/5]

<翻刻本>

- ◆ 「北条五代記」(『通俗日本全史』第15巻 早稲田大学出版部 1913 [210.1/41/15])
- ◆ 「北条五代記」(『改定史籍集覧』第5冊 通記 第26 近藤出版部 1925 [210.08/13/5])
- 「校訂 北條五代記」 三浦浄心著 雄山閣 1940 (雄山閣文庫) [K24.7/55]

- ◆ 「北条五代記(抄)」(『北条史料集』萩原龍夫校注 人物往来社 1966 (第二期 戦国史料叢書1) [K24. 7/17])



史料についてさらに知る－参考文献－

- ◆ *水江漣子「初期における江戸の住民意識－『慶長見聞集』の一考察」(『社会文化史学』(2) 社会文化史学会 1966)
- ◆ *浮橋康彦「西鶴文体の一原型－『北条五代記』と『日本永代蔵』」(『国文学攷』(43) 広島大学国語国文学学会 1967)
- ◆ 水江漣子「三浦浄心について」(『三浦古文化』(24) 三浦古文化研究会 1978 [K20. 3/3/24])
- ◆ *大沢学「三浦浄心の著作における慶長十九年」(『近世文芸』(32) 近世文芸研究と評論の会 1987)
- ◆ 水江漣子「三浦浄心について」(『日本歴史』(479) 吉川弘文館 1988 [Z210. 05/3])
- ◆ *大沢学「三浦浄心の著作と『吾妻鏡』」(『国文学研究』(96) 早稲田大学国文学会 1988)

小田原北条氏略系図

